

調査・事例報告

## 高大連携教育の実践事例に見る効果と課題

香取 智宜

A Case Study of the High School-College Collaborative Program

KATORI Tomonori

### 要 旨

本稿は、高校生が高等学校と大学の双方の授業を受けることにより、両者の授業形態と教育の目的についての取り組みの違いをどのように捉えたかを述べるとともに、高校生が大学入学後に期待する教育のあり方や、大学の授業に対する高等学校教員の要望および大学教員が考える高大連携授業の方向性についてアンケート調査等を実施することにより、現在と将来の高大連携教育の効果と課題を模索するものである。

### キーワード

グレードアップ型高大連携    チャレンジ型高大連携    深い学び    大学への理解

### 目 次

- I. はじめに
- II. 松本大学における高大連携授業の経緯と内容
- III. 高大連携授業の調査からの考察
- IV. 高大連携授業のヒアリング調査結果
- V. 大学入学後における高大連携授業の効果と課題

文献

## I. はじめに

本稿は、本学が平成18(2006)年から11年間にわたって取り組んできた長野県穂高商業高等学校との連携教育についての効果と課題について述べるものである。

高大連携教育の形態は多岐にわたると考えられるが、本学が行っている実践事例を紹介し、高校生と短大生へのアンケート調査、および短大生、高等学校教員、大学教員へのヒアリングによる調査により多角的な分析を試みた。

## II. 松本大学における高大連携授業の経緯と内容

本学の高大連携教育は、平成18年当時本学近隣にある長野県穂高商業高等学校(以下、「穂商高」という)からの入学者が非常に増加していたことを背景に、商業高校における学びが大学教育等の進学先において如何なる展開となっていくかを体験させるという観点、いわゆるキャリア教育的な観点からの取り組みを指向するものであり、高校生の進学先として本学を紹介するという学生募集の観点とは一線を画するもので

表 1 高校授業グレードアップ型連携 講義日程 (穂高商業高等学校)

回	日 程	科 目	テ ー マ
1	4月18日	財務会計①	簿記と財務諸表の相違(1) 売上高と売上原価の表示①
2	4月25日	財務会計②	簿記と財務諸表の相違(2) 売上高と売上原価の表示②
3	5月9日	管理会計I	意思決定会計総論 ～ディズニーランドへ行く～
4	5月23日	財務会計③	簿記と財務諸表の相違(3) 現金預金と銀行勘定調整表
5	5月30日	財務会計④	簿記と財務諸表の相違(4) 債権と債務
6	6月13日	管理会計II	意思決定のための利益計算 ～焼きそば屋台の利益計算～
7	6月20日	管理会計III	業務執行的意思決定会計(1) ～特別注文がきたらどうする?～
8	6月27日	財務会計⑤	簿記と財務諸表の相違(5) 有価証券①
9	7月4日	財務会計⑥	簿記と財務諸表の相違(6) 有価証券②
10	8月22日	管理会計IV	業務執行的意思決定会計(2) ～部品を作るか、買うか?～
11	8月29日	管理会計V	業務執行的意思決定会計(3) ～最適セールスマックス～
12	9月5日	管理会計VI	業務執行的意思決定会計(4) ～リニア・プログラミング～
13	9月12日	財務会計⑦	簿記と財務諸表の相違(7) 有価証券③
14	9月26日	財務会計⑧	簿記と財務諸表の相違(8) 有価証券④ 有形固定資産①
15	10月3日	財務会計⑨	簿記と財務諸表の相違(9) 有形固定資産②
16	10月24日	管理会計VII	構造的意決定会計(1) ～正味現在価値の計算～
17	10月31日	管理会計VIII	構造的意決定会計(2) ～設備投資の意決定モデル～
18	11月7日	管理会計IX	構造的意決定会計(3) ～法人税の支払いを考慮する～
19	11月14日	財務会計⑩	簿記と財務諸表の相違(10) 外貨建取引
20	11月21日	財務会計⑪	簿記と財務諸表の相違(11) 引当金①
21	11月28日	財務会計⑫	簿記と財務諸表の相違(12) 引当金②
22	12月12日	管理会計X	構造的意決定会計(4) ～設備の自動化～
23	1月16日	管理会計XI	構造的意決定会計(5) ～取替投資～
24	1月23日	管理会計XII	構造的意決定会計(6) ～リースか、購入か?

(講義時間 10:20～12:10)

る。この本学の高大連携教育には次の2つの形態がある。

## 1. グレードアップ型高大連携授業

まず1つ目は、高校2年生までに日本商工会議所主催簿記検定試験(以下、「日商」という)の2級を取得した生徒、あるいはこれと同等レベルの生徒に対して、日商1級レベルの財務会計および管理会計の講義を行うものであり、高校3年生を対象に簿記・会計の高いレベルの学習をとおして、将来の学習意欲を高めることを狙いとしている。本学の2人の教員が交代で高校に出向き、1回100分の講義を年間24回行っている。この授業は、高校における簿記・会計の授業を大学レベルにグレードアップさせるものであり、「グレードアッ

プ型高大連携」と呼んでいる。参考までに過去に実施された標準的なシラバスを表1に掲げる。

## 2. チャレンジ型高大連携授業

2つ目は、高校の夏休みと春休みを利用して各3日間、高校生を本学に受入れ、大学等で行われている一般的な経済、経営、商学および会計の基本科目を、高校生向けにアレンジした内容と時間割(1コマ60分)で講義するものである。この連携は、高校2年生を対象としており、彼らが現在高校で学んでいる内容が大学等において、どのように展開していくかを学ばせ、体験させ、知らしめ、高校での学びの重要性と将来性を再認識させることを狙いとしている。

また、同時に教室移動や学食利用をとおして、

表2 大学授業チャレンジ型連携(夏) 講義時間割

	1時限 9:40~10:40	2時限 10:50~11:50	3時限 13:00~14:00	4時限 14:10~15:10
7月30日(水)	キャリアクリエイト① 524教室	経営分析① 524教室	マーケティング① 232教室	銀行論① 121教室
7月31日(木)	パソコン演習① 332教室	Excel経営分析① 332教室	銀行論② 132教室	マーケティング② 231教室
	Excel経営分析① 332教室	パソコン演習① 332教室		
8月1日(金)	会計学入門① 521教室	経済学入門① 513教室	実業高校からの進学・就職 524教室	アンケート記入 524教室(14:30終了)

表3 大学授業チャレンジ型連携(春) 講義時間割

	1時限 9:40~10:40	2時限 10:50~11:50	3時限 13:00~14:00	4時限 14:10~15:10
3月3日(火)	マーケティング③ 521教室	経済学入門① 523教室	経営分析① 232教室	実業高校からの進学・就職 524教室
3月4日(水)	パソコン演習② 332教室	Excel経営分析② 332教室	銀行論③ 514教室	マーケティング④ 515教室
	Excel経営分析② 322教室	パソコン演習② 322教室		
3月5日(木)	銀行論③ 121教室	会計学入門① 121教室	キャリアクリエイト② 523教室	閉講式 514教室(14:40終了)

キャンパスライフを疑似体験し、大学に対する一般的、かつ、具体的なイメージの定着を目指している。この取り組みは、高校生が大学生活にチャレンジするということから「チャレンジ型高大連携」と呼んでいる。この連携授業には、近年、穂商高に加えて複数の商業高校の参加が見られ、多い時には200名に近い高校生を受入れることもある。参考までに過去に実施された標準的な時間割を表2および表3に掲げる。

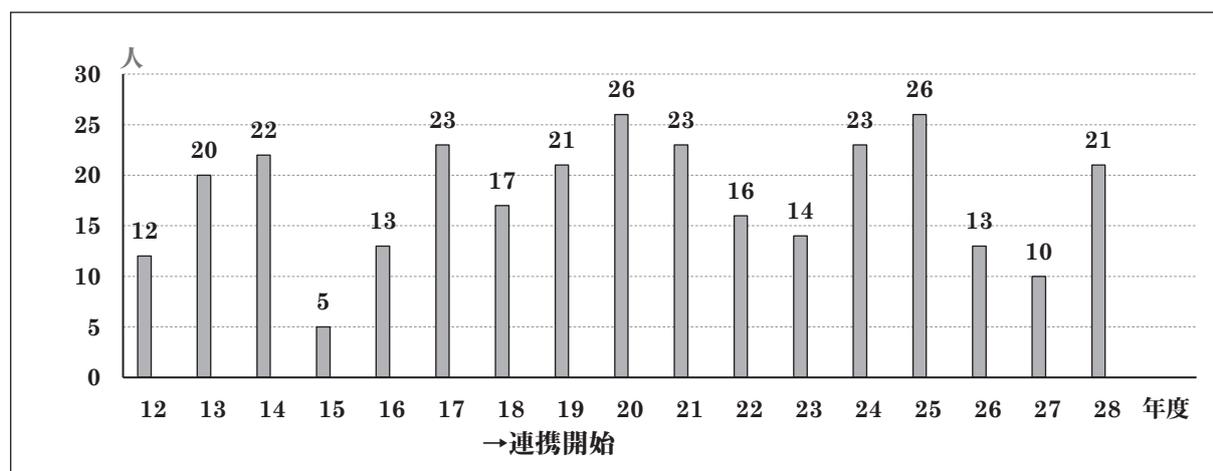
### 3. 高大連携と本学進学との関係

穂商高との高大連携と同校からの本学入学者の関係はグラフ1. の通りである。

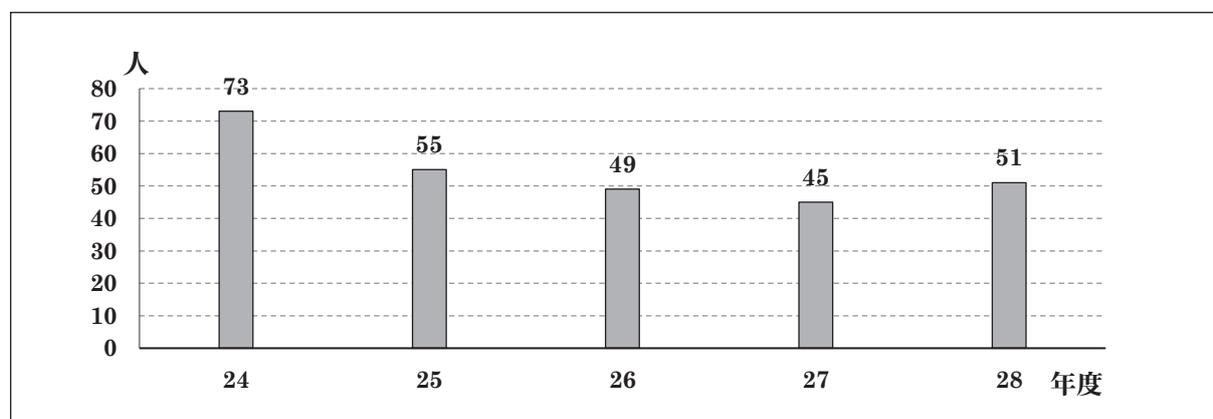
年度によって入学者数には最大で20名ほどの変動が見られ、高大連携が開始された平成18年

度の前後で、特に大きな変化があったとも言えないが、一高校からの20名を超える入学者は、本学の学生募集にとって非常に大きな数値であると言える。高大連携の開始によって、本学に対する穂商生の進学状況においては、少なくともマイナスの影響は無かったと言える。近年、穂商高に加えて複数の商業高校が「チャレンジ型高大連携」に参加してきているが、それらの高校からの本学入学者の合計数を示したのがグラフ2. である。

平成24年度は該当する入学者は73名と非常に多く、その後は50名前後で推移してきており、本学の入学定員の25%が高大連携参加校からの入学と言える。本学の高大連携教育は、冒頭で述べたとおり学生募集の観点よりもキャリア教育的な観点を重視しているが、結果としては、穂商



グラフ1. 穂商商業高等学校からの本学入学者数



グラフ2. 最近5年間の連携参加校からの入学者数

生のみならず「チャレンジ型高大連携」による商学系高校の生徒にとって本学でのキャンパス体験が、平成18年度の高大連携開始当初から本学への進路決定に比較的安定した影響を与えていると言えるであろう。

### Ⅲ. 高大連携授業の調査からの考察

高大連携授業の実施にあたり、高校生、短大生(本学の高大連携授業に参加した学生)、高等学校教員および大学教員のそれぞれによりアンケート調査やヒアリング調査を行った。以下にその結果を示すが、それぞれの調査の内容に相違が見られるのは、教授する側と教授される側の視点が異なるためと考えられる。

#### 1. 高校生に対する調査(アンケート)

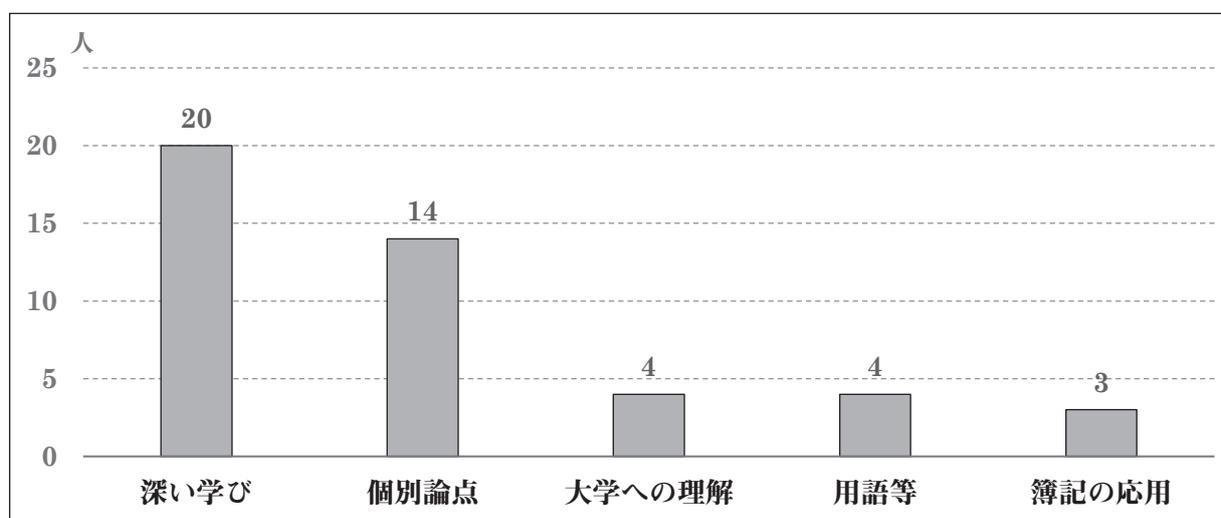
高校生には、高大連携授業のどのような点が良かったかについて平成24(2012)年度から平成27(2015)年度までの「グレードアップ型連携」に参加した生徒45名に、自由記述および複数回答可のアンケート調査という形で意見を述べてもらった。その結果を示すのが、下記のグラフ3.で

ある。

アンケート調査の結果の中で、授業において良かった点として「深い学び」と「個別論点」が高い評価を得たが、そのうち最も高い評価を得たのは「深い学び」であり、これは大学の授業が高校の授業よりも専門性の高い内容であったことを示すものである。次に高い評価は「個別論点」であり、この言葉の意味するところは「深い学び」と重複する部分もあるが、個々の学習論点が詳細、かつ高度な内容であることを示している。これ以外の回答では「大学への理解」ということで、大学生活を実体験できたという意見もある一方で、高校生があまり大学に対する理解や興味を求めていないとする意見もあった。総じて高大連携授業に参加した高校生の意見は、高校の授業と比較して大学の授業は、難易度は高いが深く専門的な知識を身につけることができるということ、その反面で高校での基礎学習が疎かになっている場合、非常にハードルの高い授業になってしまい授業そのものに参加することに不安があるという意見もあった。

このアンケートで具体的な意見としては、次の3点があげられた。

- ・より高度な知識習得に対する満足度が高い。
- ・高校生の時点では、大学に対する理解や興味を



グラフ3. 高大連携授業のどのような点が良かったか

- 求めている生徒はそれほど多くない。
- ・高校での基礎学習が疎かになっている場合、ハードルの高い授業になってしまう。

## 2. 短大生に対する調査(アンケート)

このアンケートは、高校時代に高大連携授業に参加し、本学に入学した平成27(2015)年度と平成28(2016)年度の在学生96名中45名を対象に行ったものである。アンケートは、①高大連携授業に参加したことが大学入学後の授業に役立ったか、②高大連携授業のどのような点が良かったか、を大学入学後にフィードバックしてもらうためアンケート調査を実施した。

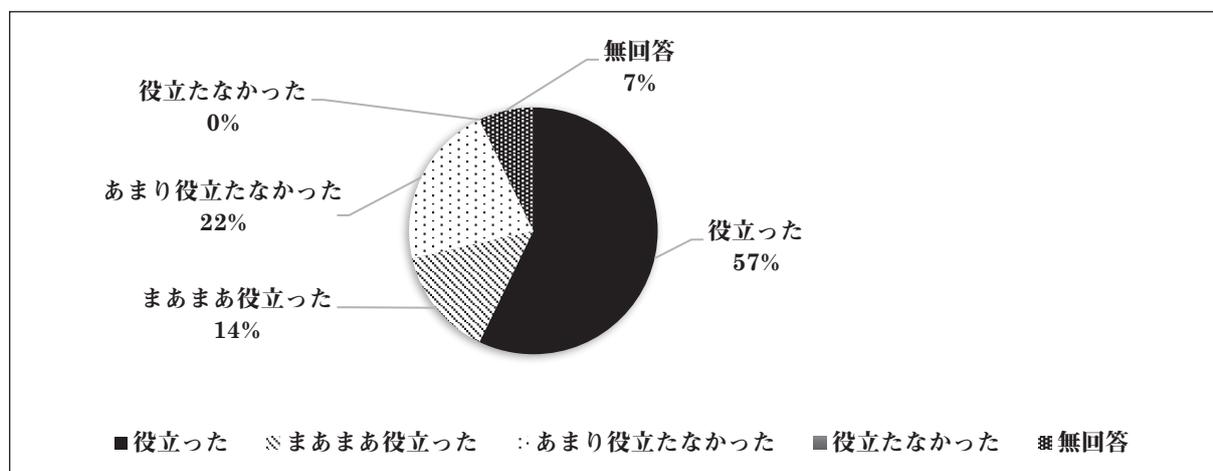
まずグラフ4. は、①高大連携授業に参加したことが大学入学後の授業に役立ったかに対する回答を示している。

このアンケートは、高大連携授業が、「役立った」、「まあまあ役立った」、「あまり役立たなかった」、「役立たなかった」という4つの回答に分類して答えてもらったものであり、個々の回答の詳細な理由は問うていないため、回答数値(パーセンテージ)のみでの判断となる。グラフで明らかのように「役立った」が57%、「まあまあ役立った」が14%となっており、併せて71%になることから高大連携授業を行っている有用性はあるも

のと思われる。しかし、「あまり役立たなかった」と答えた学生が22%いることも軽視することはできない。

次に、②高大連携授業のどのような点が良かったかを大学入学後にフィードバックしてもらった結果をグラフ5. で示した。このアンケートも自由記述および複数回答可の形で意見を述べてもらったものである。

この結果は、同一学生からの高校時代の回答と大学入学後の回答を比較したものではないが「大学への理解」に対する回答が高校生に対するアンケート結果に比べて非常に多くなった点が特徴としてあげられる。つまり、高校在学中には大学に対する理解や興味を示す生徒が少なかったが、大学入学後には大学に対する考えが大きく変化してきたということである。これは、高校在学中は、大学というものが実感できず「グレードアップ型」高大連携に参加していても、教室等の施設や設備は普段使用している高校のものであり、周りの人達も教員をはじめ友人達も日々の生活と変わらぬ環境にあったことが一因ではないかと考えられる。しかし、本学入学によって環境等が変わることにより、明らかに授業スタイルや授業カリキュラム、そして、教室等の施設が高校時代とは大きく相違することなどを実感し、高大連携授業の持っていた意味が学



グラフ4. 高大連携授業はあなたにとって役立つものであったか

習だけのものではなかったということを再認識した結果と思われる。

具体的なアンケート調査による「大学への理解」については、以下の4点がポイントになっているのではないかと思われる。ただし、本アンケート調査の対象学生は、「グレードアップ型」の受講生と「チャレンジ型」の受講生およびその両者によるものから、休憩時間中等に雑談として聞いた感想を記載したものである。

- ・ 高度な内容を取扱っている。(グレードアップ型およびチャレンジ型)
- ・ 高等学校の授業と雰囲気が違う。(グレードアップ型およびチャレンジ型)
- ・ パワーポイント等使用により授業が工夫されている。(チャレンジ型)
- ・ 大学は広い設備が保有されている。(チャレンジ型)

また、このアンケート調査では、高大連携授業に参加した短大生から高大連携授業に対する今後の期待についても質問したが、その回答は次の2点に集約することができる。

- ・ 上級簿記検定の資格取得を目指したい。(グレードアップ型)
- ・ 社会人となったときの簿記以外の会計知識を身につけたい。(グレードアップ型およびチャレンジ型)

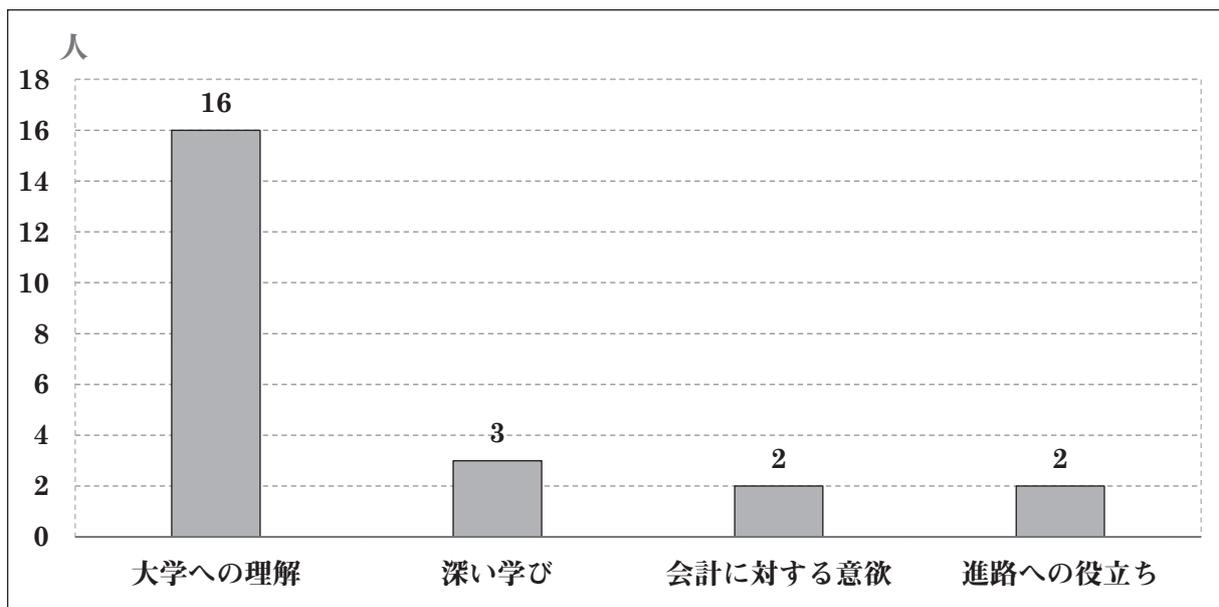
## IV. 高大連携授業のヒアリング調査結果

当該調査は、高校時代に高大連携授業に参加した本学生、高等学校教員および大学教員からヒアリングによる調査を行い、その結果をまとめたものである。

### 1. 本学生に対する調査 (ヒアリング)

学生に対しては、高大連携授業参加受講生28名のうち、3名の学生に下記の質問に基づきヒアリング調査を実施した。

ヒアリング対象者は穂商高出身の現在1年生の簿記上級クラス2名、中級クラス1名とした。なお、本学では簿記の授業を初級(初学者を対象)、中級(基礎的な内容を学習済み)、上級(日商2級



グラフ5. 高大連携授業のどのような点が良かったか

取得者もしくは同レベルの内容を学習済み)の3クラスに分けている。ヒアリングは2016年10月3日に実施した。

質問事項…高大連携授業に参加して感じた高等学校との相違点について。

- 回答 ①学生数が多いため、教員と学生の距離を感じた。(チャレンジ型)  
 ②社会に通用する実践的な会計教育が行われている。(グレードアップ型およびチャレンジ型)  
 ③定められた教科書が無い場合がある。(グレードアップ型およびチャレンジ型)  
 ④自主性が問われる授業である。(グレードアップ型およびチャレンジ型)  
 ⑤短大生の授業風景を見てみたい。(チャレンジ型)

## 2. 高等学校教員に対する調査(ヒアリング)

高等学校教員に対しては、穂商高の教員にヒアリング調査を下記の2項目に基づき実施した。ヒアリング対象者は穂高商業高等学校商業科担当教諭で、2016年10月12日に実施した。

質問事項…現行の高大連携授業のスタンスをどう考えるか。

- 回答 ①簿記検定試験の意欲を高めたい。  
 ②大学に対する理解を深めさせたい。  
 ③大学進学率の向上を高めたい。(特に大学からの就職への有用性)

質問事項…高大連携授業の今後の改善点という観点からどう考えるか。

- 回答 ①幅広い会計学の授業の実施を要望したい。

- ②カリキュラムの時間を検討したい。  
 ③高大連携授業参加生徒の峻別を行いたい。  
 ④生徒の授業への取り組みの姿勢を見直すべきである。

## 3. 大学教員に対する調査(ヒアリング)

大学教員に対しては、本学の教員にヒアリング調査を下記の2項目に基づき実施した。

ヒアリング対象者は松本大学管理会計担当教授で、ヒアリングは2016年10月20日に実施した。

質問事項…現行の高大連携授業のスタンスをどう考えるか。

- 回答 ①入学前学習による大学授業へのスムーズな移行を再考したい。  
 ②高大連携授業をとおして、より多くの高校生の大学進学意欲の向上を図りたい。

質問事項…高大連携授業の今後の改善点という観点からどう考えるか。

- 回答 ①高校生に如何に授業を楽しく教えるかを工夫しなくてはならない。  
 ②日商簿記検定試験改定に伴う今後の対策をどのようにすべきか。  
 ③大学と高校の合同授業を行うことを検討したい。  
 ④高校の教員が短大生に授業を教える形態の連携を行いたい。(大学授業サポート型連携)  
 ⑤より多くの高校との連携を進めるための日程調整やカリキュラムの調整。

補足として、短大生、高等学校教員および大学教員からのヒアリング調査は、現在の高大連携授業を忌憚なく述べてもらったものであり、これについての結論は現時点では未だ導きだされ

ていない。

## V. 大学入学後における高大連携授業の効果と課題

少なからず時間と労力をかけて高大連携授業を実践する以上、何かしらの効果を求めたいと思うが、調査をとおして感じたことは、短大生、高等学校教員および大学教員が、高大連携授業をどのように捉えているかということであり、これはそれぞれの立場の違いから意見が相違するのは当然のことであると考えられる。しかし、多くの資格取得を目指すということや学習意欲を向上させるという点においては共通の認識があると考えられる。特に本学はビジネス系大学であるため必然的に簿記の学習に重点をおくこととなる。高大連携授業においても簿記の資格取得の重要性を説いており、高大連携授業に参加した学生の簿記資格の取得割合が比較的高いのも効果の一つであると思われる。

資格取得に対する意欲の向上は、将来の就職等を考える上でプラスの要因はあれマイナスの要因になることはないが、大学での学生生活が幅広い見識を培うということを考えると資格取得のみならず大学で開講されている資格取得とは関係のない授業にも高大連携授業で今まで以上に触れる必要があると考える。このような課題に取り組むことも高大連携の役割を高め、高校生にとっての就学意欲の向上と、それに基づく上位校への進学意欲の醸成につながっていくと言えるであろう。

### 文献

- 1) 大滝夏美、「高校生の進路選択に関する志向性と今後の高大連携のあり方について」『立命館高等教育研究』(第13号)、pp.15-30(2013)
- 2) 永井次郎(2007)「高大連携体験記—その長所と短所—」『福井大学アドミッションセンター年報』(第2号)、pp5-9(2007)
- 3) 矢野修一「高大コラボゼミの意義と課題」『高崎経済大学附属産業研究所紀要』(第46巻第2号)、pp1-22 (2011)